

1 FDワークショップ開催報告 2016年12月7日(水)18:00~

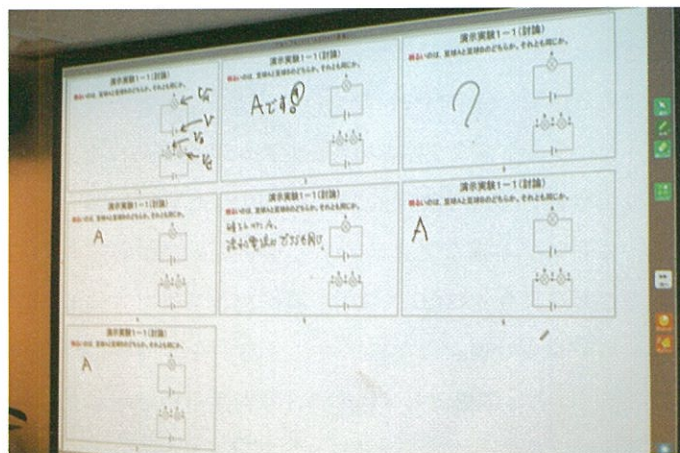
テーマ 「演示実験を用いたアクティブ・ラーニング型授業の方法」

講師: 谷口 和成 先生
(京都教育大学 教育学部)

2016年12月7日に開催された甲南大学FDワークショップでは、京都教育大学の谷口和成先生を講師にお迎えし、「演示実験を用いたアクティブ・ラーニング型授業の方法」というタイトルで、ご講演をいただきました。谷口先生が物理教育の場で実際に活用されているメソッドを、実演を交えながらお聞きすることができ、大変貴重な体験をすることができました。

ご講演は、2016年に運用を開始した7号館1階のサイエンス・ラーニングコモンズで行われ、アクティブ・ラーニングの意義と目的のご紹介から始まり、米国で開発された「相互作用型演示実験講義」の方法論のご紹介、それを活用した授業の実施とその効果に関するデータのご紹介を経て、最後にその方法の一部を体験する、という流れとなりました。

テーマとなった「相互作用型演示実験講義」は、物理の大学教育を対象とし、アメリカで学習プログラムとして練り上げられたものです。教員が実験を実演しながら、2~3名の学生で編成されたグループのディスカッションを通じて大学の物理の授業に対応するための基礎的な概念を形成する、というもので、その一部を体験させていただきましたところ、非常に面白いものでした。



当日の体験の対象となった題材は電気回路でした。これは、豆電球と電池を一つずつ使って点灯させる簡単な問題から出発するもので、授業の進行にともなって電池と電球の組み合わせが複雑になります。参加者は、学生になったつもりでグ



7号館1階のサイエンス・ラーニングコモンズにて

ループを編成し、各人で問題を考えた後にグループとしての共通意見をまとめ、その上で(多くは直感と反するような)講師の実演を見て、自分たちの議論の振り返りを行います。ついつい引かかって間違った答えに飛びついてしまうような課題を前にすると、チームメンバー間で自身の答えとその答えにたどり着いた理由を説明しなければならない状況が発生し、聞き、話し、まとめる、という能動的な学習の場が作り出されました。さらに、その答えは講師の実演で鮮やかに明らかになるので、さらにディスカッションが白熱するという仕掛けになっていました。また、授業を支援するツールとして、コンピュータと接続して瞬時にグラフとして計測結果を出力することができる電圧計や電流計といった機器や、クリッカーも登場し、教示方法とITを活用した教具との効果的な相互作用も意識されていることも印象に残りました。

当然、このような授業展開を毎回考えるのは困難ではないのか、という懸念が出るのですが、これらは米国において大学物理の入門部分を対象として、「物理教育研究」という学問分野の中で10年以上かけて作りこまれ、学習プログラムの集合体として整備されている、とのご説明を受けました。このプログラムでは、教示の方策が示されるだけでなく、授業前と授業後の理解状況の確認テスト問題も提供されており、授業を通じた学生の「伸び」を計測できる、という非常に野心的な設計となっていました。ゆえに、この興味深い取組みをそのまま自分の授業に持ち込むのは困難であるのですが、授業進行の切り口としては非常に参考になるお話であると共に、別個で教材作りに頭を悩ませるのではなく、計画的に蓄積して活用する枠組みを整備する、という考え方についても大変興味を惹かれました。

2 アクティブ・ラーニング型授業の参観と意見交換会



授業参観風景

甲南大学で多様に行われているアクティブ・ラーニング型授業を対象に、2016年度に教職員参観と意見交換会を実施した。前期には、6月21日に経済学部「プロジェクトゼミ」(担当教員：柘植隆宏、寺尾建)の授業参観を行い、授業後に意見交換会を行った。また、7月5日には、文学部「社会調査基礎演習Ⅰ」(担当教員：阿部真大、帯谷博明)の授業参観を行った。後期には後述の7科目を参観対象とし、12月20日に「アクティブ・ラーニング型授業意見交換会」を実施した。以下では、授業参観と意見交換会での議論を基に各授業の特徴を紹介する。

まず授業参観を通じて各学部1年次科目において多様なアクティブ・ラーニングの手法が取り入れられていることが分かった。文学部社会学科1年次の必修科目である「社会調査基礎演習Ⅰ」(前期4単位)は、大学生として必要な情報の探し方、レポート等の読み方、書き方等を学ぶ科目である。参観日の授業では100名前後の学生が6名程度のグループに分かれて各自のレポートを読みコメントを書く相互評価を行い、レポートの改善点を議論する授業内容で、アカデミックスキルの修得に効果的な手法が活用されていた。同じく1年次科目の「基礎リテラシー」(マネジメント創造学部、担当教員：井上明 他)もアカデミックスキルの修得を目標とした科目であり、後半にプレゼンテーションと教員講評があり、最終週のプレゼンテーション大会で最優秀チームが選ばれるという「発表」に比重が置かれた点が特徴であった。「ベーシック・

キャリアデザイン」(担当教員：武田佳久)ではLAを活用して多くのグループワークが展開され、学生が主体的に議論や発表を行う中で自らのキャリアを考える授業になっている。同じく1年次科目の「基礎体育学演習」(担当教員：吉本忠弘)では様々なスポーツを行いながらコミュニケーション力も高め、スポーツ嫌いの学生にも参加を促す多様な仕組みを取り入れていることが印象的であった。2年次対象の「プロジェクトゼミ」は本学卒業生の企業経営者から出される課題の解決策を学生が研究し、企業経営者の前で発表し議論するというPBL型の授業であり、学生の濃密な主体的学びを促すことに成功している点が特徴である。基礎共

通科目である「自己の探求(1・4クラス)」(担当教員：福留留美、高石恭子)は心理学の手法を活用し学生の自己理解を深める興味深い授業である。また、同(4クラス)は120名程度の大講義で効果的にグループワークを行い、他者とのコミュニケーションを通じて自己を見つめる活発なワークを実施していることが印象的であった。留学生と甲南大学生が共に英語で学ぶ「ジャパスタディーズⅩⅢ」(担当教員：中村耕二)は担当教員による極めてアクティブな授業進行で、次々と出されるテーマに参加者が英語で考え議論するという「英語を使ったアクティブ・ラーニング」という特徴があった。経済学部3年次対象の「現代アジア経済Ⅰ」(担当教員：高龍秀)は100名以上の専門科目でグループワークを5回程度実施した取り組みである。事前に資料を読んだうえで「課題シート」をまとめて授業に持参しワークを行うことで、予習の充実化とワークによる主体的学習をめざした点に特徴があった。

授業参観と意見交換会を通じて、甲南大学各学部・センターにおいて多様なアクティブ・ラーニングが展開されていることが共有された。つまり、履修する学生を主体的な学びに取り組ませるような様々なノウハウを各授業担当者が駆使しており、結果として、各科目の到達目標で示した能力を身につけるという教育効果において成果をあげている。また、FD活動において授業を実際に参観することが有効であることも実感することができた。

教育学習支援センター所長 高 龍秀

3 2016年度FD活動報告

甲南大学FD委員会の主な活動：○新任教員研修会の実施○学外からの講師招聘授業の実施○FDシンポジウムの開催：「経済学ベストレクチャー事例発表」(6/1 経済学部共催)○FDワークショップの開催：「演習実験を用いたアクティブ・ラーニング型授業の方法」(12/7)○全学共通の授業改善アンケートの実施及び集計・分析○FD委員会開催：学部・研究科・センターの活動を情報共有、今後のFD活動のあり方を検討○「甲南FDニュース」の発行、等

《各学部・研究科・センターからの主なFD活動報告》

〈文学部・研究科〉

○授業改善を図るための取組：授業公開(11/28～12/10)及び授業改善状況について意見交換会を実施。大学院でアンケート実施に基づいた授業改善を図るための意見交換会を開催、等

〈理工学部・研究科〉

○FD活動の組織的取組：教授会後にFD懇談会を開催○授業改善を図るための取組：物理学科授業公開(12/3)○FD安全講習会開催○FDワークショップ：「演習実験を用いたアクティブ・ラーニング型授業の方法」(12/7)○WEB教育コンテンツ配信-理工コレクション(後期開講科目)、等

〈経済学部・経済学専攻〉

○プロジェクトゼミの参観を実施(7/2)○授業改善アンケートに基づいた取組：第2回ベストレクチャーシンポジウム開催(6/1 FD委員会共催)○ゼミの配属問題を考える教員の勉強会を実施○授業公開を常時実施○大学院全体のアンケート実施○経済学部FD委員会開催：3つのポリシー及びカリキュラムマップ等について、等

〈法学部〉

○法学部独自の授業アンケートの実施(5/23～6/3、10/24～11/4)○授業参観の実施(6/24、12/8)及び授業参観検討会の実施(6/28、12/13)○法学部FD懇談会開催：DP、CPについて検討(7/5)○法学会ホームページでの過去問の公開、等

〈経営学部・経営学専攻〉

○授業改善を図るための取組：授業参観の実施(7/13、10/15)及び検討会開催(11/1)・大学院授業改善アンケートの実施○教育方法改革に対する取組：インターンシップに関するアンケート調査の実施及び集計結果についての検討会○教育方法改革に対する取組(BP関係)：インターンシップワークショップで事例紹介(11/10、12/6)及び報告会(1/2)○アドバイザーボード会議開催予定○FD研修会開催(7/5、7/19)：DP・CP等について、等

〈知能情報学部〉

○相互研究室見学及び意見交換会の実施○FD研修会開催(7/3 3つのポリシーの見直しについて)○授業の改善を図るための取組としての意見交換会(7/12)・授業公開(10/28、11/11)○知能情報学部FD委員会の開催(計6回)、等

〈マネジメント創造学部〉

○FD研修会(7/6 3つのポリシーの見直しについて・7/20アンケート結果に基づく授業改善について)等○FD Lunch meeting(5/18CUBE学生のGPAと能力向上感に影響を与える要因について・11/30基礎リテラシーと研究プロジェクト

概論とのリンクについて等○外国語教育担当者会議(7月、1月)○基礎リテラシー科目の授業公開(11/16、12/14)、等

〈フロンティアサイエンス学部・研究科〉

○授業改善のための取組：7/25学生アンケートに基づく学部・研究科合同授業改善検討会の実施○教員間相互授業確認研修(T-Learning)の実施：アンケート結果の相互閲覧が可能○授業の質保証の取組：全講義を教職員に公開、試験問題の相互閲覧が可能○全専任教員対象の平成27年度研究成果報告書の作成○FIRST FD委員会の開催(5/13、7/8、9/23、10/24)：学部と大学院におけるFD活動と研究推進の方策等を議論、等

〈国際言語文化センター〉

○教員の教授能力向上及び教育の質保証のための活動：公開授業の実施、外国語教育担当者会議の開催(カリキュラム・ポリシー等)、言語教授法・カリキュラム開発全体研究会(言語教育の向上及び異文化理解の促進)、カリキュラム・ポリシーの整備、外国語教育検討委員会：言語教育・カリキュラム改善、授業改善のための授業参観及び検討会の実施、英語教育連絡協議会の開催(11/25「21世紀に求められる英語教育のあり方」、等

〈教職教育センター〉

○「授業改善を図るための制度的取組に関する申合せ」の制定：対象科目における授業改善アンケートの実施・アンケート集計結果に基づく課題等の取りまとめ及び授業改善を図るための検討会を実施、等

〈スポーツ・健康科学教育研究センター〉

○年度初めの専任教職員及び非常勤教職員全員での打ち合わせ会の実施○毎年度、授業担当教員用の手引きの作成と改訂を行い、非常勤も含めた関係教職員全員の授業実施についての理解を図っている。○スポーツ・健康科学研究会の名称で各教員の研修会参加等の報告会の計画と実施、等

〈共通教育センター〉

○共通基礎演習の講義内容及び講義方法の開発と改良：共通基礎演習の講義内容及び講義方法の開発・改良・少人数教育を実現するための共通基礎コース定員の見直し・3つのポリシー等についてFD研修・意見交換会の実施

〈法科大学院〉

○授業参観の実施：夜間開講科目中心。参観報告書の作成・意見交換会の実施○授業アンケートの実施：全科目対象。集計結果に基づき教授会で意見交換会を実施。科目担当者がコメントを作成、学生ヘフィードバック○司法試験合格者に対する無記名の授業評価アンケートの実施、等

4 学外研修報告

「平成28年度教育改革ICT戦略大会」

日時・2016年9月6日、9月7日

会場・アルカディア市ヶ谷(東京、私学会館)

共通教育センター 嶋貝 耕一

私立大学情報教育協会(私情協)には、情報教育研究センター設立以降今日までずっとお世話になっており、9月の教育改革ICT戦略大会には毎年参加しています。当初は「情報教育」がキーワードでセンターから幾度となく発表も行いましたが、十年ほど前よりICTによる「教育改革」が新たなテーマとなりました。

2002年より数年間、未熟ながら「教育の情報化フォーラム」委員を務めさせていただき、その間、先進的な教育改革を行っているいくつかの私立大学へも取材と大会の準備のためおじゃまさせていただきました。

本年度もアクティブラーニングを中心とした講演や研究発表が多数行われましたが、中でも三年前まで中教審会長であった日本学術振興会安西祐一郎先生のご講演「3つのポリシー省令化による大学の内部質保証：課題と展望」が今後の高等教育の方向性を示す重要なものであるという印象でした。

ご講演で強調されていたのが、「文部科学省は、内部の教育改革が本当に行われているのかどうかを見ている。」というご発言で、学内に箱物をつくり、教育改革のための制度をいくら充実させてもダメで、大学全体の教育の中身が必ず改革されねばならないとのことでした。

説明はほとんどありませんでしたが、資料のなかに本年度本学が行ったPROGテストを3000人の高校生に対し実施した結果(「PROG白書2016」、学事出版)の帯グラフが一例として提示され、若者のジェネリックスキルの低下が端的に示されました。河合塾による高校ランクのうち、超進学校生徒の約半数は「オールマイティ(問題なし)」ですが、残り約半数はコンピテンシーやリテラシーの不足が指摘されています。これを無理やりそのまま高校生全体にあてはめると、半数以上の生徒の社会人基礎力が低下しているということを示しています。

教育改革の目的の最後にかかげられている「幕末から明治にかけての『教育維新』に匹敵」、すなわち私なりに解釈するならば、江戸時代における昌平黉(昌平坂学問所)に代表される国学や漢学の教育から、欧米の制度を取り入れた洋学中心の大学設立に匹敵する改革を今実行する必要があるものと判断しています。それに相当する、グローバル化やアクティブラーニングなどに代表される、初等中等教育を含む日本の教育全体の改革が現実のものとなるかどうか、日本の将来を占う鍵となりそうです。

第3回「能動的学修の教員研修リーダー講座」

日時・2016年8月27日、9月24日、10月29日

会場・アルカディア市ヶ谷(東京、私学会館)

経済学部 寺尾 建

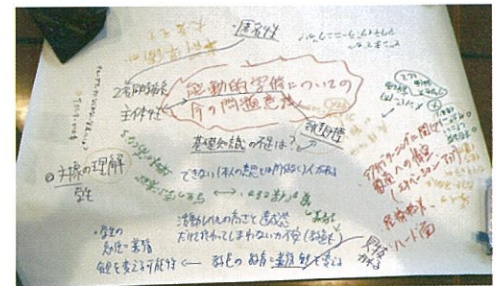
2016年の8月から10月にかけて、一般財団法人全国大学実務教育協会主催の第3回「能動的学修の教員研修リーダー講座」に参加しました。

当該講座は、全国の大学教員を対象として、教育現場においてアクティブラーニングを実践するうえで先導的な役割を果たし得る教員の養成を目的として2014年度に始まり、今年度が第3回の実施となるものです。

講座は計3回(各回は9:30から17:30までの終日)の集合研修からなり(今回は全国から30名を超える大学教員が参加しました)、その内容は、「アクティブラーニングの技法/授業設計/学修成果の測定・評価方法」について、実践を通して学ぶものでした。

第1回講座(2016年8月27日)は「基礎」として、担当する授業でそのまま使える完成度の高いアクティブラーニングの技法について学び、続く第2回講座(2016年9月24日)は「実践応用」として、アクティブラーニングを授業内で効果的に

実践するための授業設計の方法について学びました。そして、第3回講座(2016年10月29日)は「総合演習」として、それ



までの講座で学んだことを活用して、各自が実際に担当する授業のコース・デザインを再設計するという内容でした。

参加費が12万円と安くはなく、神戸から参加する場合には総額20万円以上を要することになる講座ですが、その内容の充実ぶりから、すべての教員に受講を強く勧めたいというのが、今回参加した講座についての率直な感想です。

さらに詳しい情報・報告はホームページへ!

大学トップ ▶ センター・研究所・図書館 ▶ FD-甲南大学のFDへの取り組み-

問い合わせ先

FD委員会ではFD活動やFDニュースについてご意見・ご要望を受け付けています。

教育学習支援センター事務室 TEL078-435-2592(内線2812)

MAIL lucks@adm.konan-u.ac.jp